Gundam BuildDivers
GBWC
ガンダムビルドダイバーズ
ジムとボールの世界に挑戦！
GIMM & BALL's World Challenge
Episode 4
GBWC SPECIAL MATCH-UP 4-A
ガンダムスドームブリンガー
キュベレイダムド
VS
ボリボッドボール
百式壊
GUNDAM BUILD DIVERS
GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE
ジムとボールの前に、
キュートな刺客が登場??

Episode Pre 4-A

⬇純白と漆黒――その両極端なカラーリングの2機は、無慈悲な破壊行動を続けていた。GBNの世界に風雲急を告げる2機の正体とは。

All The Things She Said
～アタシらの言うことがすべてよ～

「ピクニック・ゼロワンよりゼロスリー！　ゼロナイナー！　隊形を立て直す！　現在座標を送れ！」

フォースリーダーの呼びかけはもはや叫び声になっている。それでも返事は戻ってこない。これでメンバーのほとんどが撃破されたことになる。

「フォース・ピクニック、残存3機！　皆のフォースは!?」

「フォース・フェイスフルドッグ！　残り4！」

「希望の夜明け！　残存3だ！　くそったれ！」

その他のフォースからも悲鳴のような報告があがってくる。どこも似たような状況らしい。バトルフィールドに残ったガンプラの数は、スタート時に50機は下らなかったはずだが、もはや半数ほどに削られていた。

たった一体のキュベレイの手によって。

それでもいま、キュベレイは追い詰められようとしていた。もとはといえばバトルロイヤル形式でスタートした今回のガンプラ・バトルだったが、ライバル同士として腕を競い合っていたフォースの生き残りたちが、いまは共通の敵を前に手を取り合い、いまいましき悪魔を葬り去ろうと血眼をひとつにしている。

フィールドは、荒廃した都市を模していた。かつては栄華の象徴として林立していたであろう超高層ビルの群が、無残にも複雑に折り重なり、絡まり合うようにくずおれている。その巨大な迷路のなかを、禍々（まがまが）しくカスタマイズされたキュベレイが、ひとつの群れになったガンプラたちからの激しい砲火に追い立てられてゆく。

巨大なドーム球場が行き止まりだった。

「すこしばかり目立ちすぎたな」

キュベレイが振り返る。追い詰めた一群のなかで、フリーダムガンダムを操るダイバーが、皆を代表するかのごとくニヤリと言った。

「バトルロイヤル形式のフォース戦に、単騎で乗り込んでくるとは、根性は認めてやる。だが……万事休すだ」

表情が溜飲を下げる。屈辱を一気に晴らそうとするかのようにフリーダムが、バラエーナプラズマ収束ビーム砲、クスィフィアスレール砲、ルプスビームライフルの全砲火をフルバーストで放とうとした――その時、

「誰がひとりだって言ったかしら？」

キュベレイから、キュートな声が発せられた。

「……女!?」

フリーダムのダイバーは驚き、そして、一瞬遅れて、彼女の言葉の意味を理解した。

「仲間がいるのか!?」

次の瞬間、フリーダムの胴体が彼方から届いたビームに貫かれた。続いてまわりにいたガンプラたちも次々と打ち抜かれる。

「スナイパー！」

絶叫とも思える警告、キュベレイを追い詰めていたガンプラたちはいっせいに身を隠そうとした。しかし、襲い来るビームライフルは、目を見張るテクニックで彼らを逃さず打ち抜いていく。いいや、驚くのは射撃の正確さだけではない、スナイパー・ライフルとは思えない恐るべき威力。ザク・キャノン、ジンクスⅢ、ギラ・ドーガ、エトセトラ、エトセトラ……さらには倒れた高層ビルの陰に隠れたガンプラたちにすら、残骸を貫通したビームが命中する。

ダイバーの一人が愛機サザビーのモノアイを射線の先へ向けた、ズーム（倍率）を最大に上げる。遥か彼方でかろうじて倒れず残っている電波塔、展望台の上、膝射ちの姿勢で見たこともないライフルを構えていたのは、研ぎ澄ましたナイフのように鋭くカスタムされた、灰銀色に輝く――

「百式！」

すかさずライフルの砲口がこちらを向く、発砲、着弾。

叫び声もろともサザビーはのけぞり背後に吹き飛んだ。

「退避だ退避！」

もはや数えるほどにまで減ったダイバーの一人が絶叫する。

「この場に留まると一機残らず血祭りにされるぞ！」

慌てて唯一の逃げ道――もと来た進路へ踵を返そうとしたガンプラたちの前に、狙撃の混乱に乗じて位置を取ったキュベレイが立ちはだかっていた。

「あら、逃がさないわ。いちいち一機づつ追っかけて潰すの面倒だから、わざわざ全員、一箇所に集めたんですもの」

「誘い込んだってのか!?」

唖然とおののくガンプラたちに、キュベレイの鋭い爪が無慈悲に襲いかかった。それでもなんとか場から這いつくばり逃れたガンプラを、見逃さず百式が容赦なく狙い撃っていく。そして――

「50機以上いたんだぞ……それを、キュベレイと百式……たった二体で、しかも……五分とかからず……」

ついに最後のダイバーが、断末魔の声を漏らした。

まさに阿鼻叫喚の巷（ちまた）と化した様相に、キュベレイのダイバーが、まるでサーカスでおどけるピエロを見るように、かわいい表情をくるくるさせ大笑いした。

そんなキュベレイの隣に、飛びきた百式が降りたつ。

「……つまんねぇ……」

甘いキャンディーの香り漂う百式のコクピットで、目鼻立ち整ったダイバーが、顔に似合わない悪態をぼそり、ロリポップをくわえたまま吐き出した。

「あらマーキーったら、レディがそんな言葉使い、いけないことよ」

「……ノズの方こそ、そのネコかぶったしゃべり方、虫酸走る……」

ノズがうふふとひとつ笑い――キュベレイが、なにやら足もとに転がっているガンプラを掴み、パーツとパーツを繋いでいる可動部分を一箇所ずつ、もぎってちぎりはじめた。百式も続く。

撃破されたガンプラ達は、消失しないギリギリの寸止め状態の屍とされている。それらすべてのガンプラの関節をもぎってちぎるには、撃破した時の倍以上の時間がかかった。最後の一本、ジェスタの右足をちぎったキュベレイは――ノズは、ギリリと奥歯を噛みしめると、

「こんだけガンプラがいて、なんで見つかんないわけ……？」

その足を、力の限りぶん投げ捨てた。

「ざけんな……いったいドコにあんだよ！　黄金に輝くポリキャップってやつ！」

ノズは、打って変わった怒声をあげると、苛立ちを叩きつけるかの如く上空高くにファンネルを一基打上げ、地に散らばるガンプラの残骸に向けて放ち焼き払った。大きく起ちあがった爆炎を背に、百式とキュベレイが場をあとにする。

「……うん、やっぱそっちの方が、ノズらしい……」

コクピットでマーキーは、小さく微笑んだ。

Cherry Bomb
～かわいい爆弾～

GBNには、様々なガンプラファンがログインして来る。その全員がバト

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode Pre 4-A

あら、逃さないわ。いちいち一機ずつ追っかけて潰すの面倒だから、わざわざ全員、一箇所に集めたんですもの

Episode 4-A

いったいドコにあんだよ！黄金に輝くポリキャップってやつ！

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 4-A 狙撃なんてそんな遠くから面倒くさいことしないで、直接、殺ればいいのに

ルを目的に集っているわけではない。

「うふふふ！　ほらっ！　つかまえてみなさいよ！」

「こぉら待てったら！　あはははは！」

キラキラと陽に反射する波しぶきを豪快にあげながら、重機のごとく砂浜の砂を蹴散らし追いかけっこをしている、このピンク色ズゴックと日サロ常連風色ゴッグのビルダーカップルも然り。二人はいま、ありきたりではもはや表現しきれなくなった溢れる愛情をガンプラづくりに込め、はち切れんばかりの想いを互いに伝え合おうとしていた。

「ほうら、つかまえた！」

ゴッグがズゴックに追いついた。長い腕でズゴックを背後から抱きしめ、あるのかないのか判らない首筋に顔を近づけると、吸気する。

「とってもいい香りだ……君のスチロール系接着剤……」

「やだ、パーツの合わせ目消ししたトコ……そんな恥ずかしい匂い……嗅がないで……」

ゴッグは胸の芯がカッと火照るのを感じた。

ズゴックの肩を強く掴むと振り向かせる。

「きれいだよ……君の、海水によるサビの表現……」

ズゴックは一瞬ドキッとモノアイを輝かせたのち、うっとりと明度を落とした。

「あなたこそ……こびりついた水アカのリアルさ、とっても素敵……」

二体はしばらく見つめ合った。二つの唇が（どこが唇かは不明だが）どちらからともなく引き寄せ合い、一つに重る。そのままゴッグが、ズゴックを押し倒そうとした……その時、ゴッグのいきり立ったミサイル発射管を、海の彼方から襲い来たビームライフルが貫いた。思わず着弾位置を手で押さえうずくまったゴッグの背中に、次いで大きな爪が鋭く襲いかかる。現れたのは、まがまがしくも美しくカスタマイズされた、キュベレイ。

「ズッブズブのバカップルシーン、邪魔してごめんなさいね」

ノズは、愛機――『キュベレイダムド』のコクピットでそう告げると小さく舌を出した。ショートボブに印象的な片目メイク。洗いざらした白シャツのボタンを暑苦しそうにひとつ外せば、ただでさえ解放的だった胸元がいっそう露わになる。

「あなたたちに怨みとか、あるわけじゃないんだけれど……強いて言うなら、運が悪かったってトコ？」

突如襲いかかった悪夢に唖然と立ち尽くしていたズゴックが、ふと我に返った。目前に横たわっている愛するゴッグは、はるか彼方からの驚くべき精度の狙撃で下半身を撃破され、更に、たった一撃の爪攻撃で背面装甲を引き剥がされ、内部パーツを切り裂かれ、既に機能不全寸前らしい。ズゴックは見捨てて逃げようとした。

その目前にダムドは凄まじい機動で回り込み、平手打ちを食らわせた。頭部が（どこからが頭部でどこから胸部か微妙だが）えぐりむしられ吹き飛ぶ。胴体だけとなったズゴックは、惰性で3歩4歩と歩んだのち、突っ伏し倒れ、砂に深くめりこんだ。

ゴッグとズゴックが瀕死になって身動きできなくなったタイミングを見計らい、彼方の無人島から、ゴッグを撃ち抜いたスナイパー――『百式壊（クラッシュ）』が飛来した。スラスターの出力をミニマムにして、それでも砂嵐を思わせる砂塵を巻きあげながら、砂浜に降り立つ。

「狙撃なんてそんな遠くから面倒くさいことしないで、直接、殺（や）ればいいのに、マーキーったら」

「……あたし、コミュ障だし……」

クラッシュのコクピットでマーキーは、ロリポップをくわえたままぼそりと言った。黒髪ストレートが似合う長身。細身の素肌に直接まとった黒いレザージャケットから、たわわで形のいいバストがのぞいている。

「ま、そのおかげで――」

ノズはわくわく瞳を輝かせながら、砂上に横たわるゴッグを見下ろした。

「私が遊べるおもちゃの取り分、多めなんだけれど」

ダムドがゴッグの右脇の関節にいっきに爪を突き立て、腕をもぎ取る。その断裂面を確認し、チッと舌をひとつ打って、放り棄てる。続いて左腕、両足、その他可動部。ズゴックにも同様。そして、

「……っんだよ！　こいつらも違ぇし！」

ノズは一転、口汚く怒鳴った。ダムドの足が、肢体をもぎ取られたズゴックの胴体を力の限り蹴りつける。

マーキーはやれやれと口を開いた。

「……ホントにあんの？　黄金に輝くポリキャップなんて……」

「わたしに聞くなよ！」

ダムドが憤りのままゴッグの胴体に爪をつきたて、天高く放り投げる。クラッシュがそれをクレー射撃の的（クレー）の如く、速射で見事に撃ち抜いた。

＊

Le Petit Chaperon rouge（ル プチ シャペロン ルージュ）、通称プチ・ルーは、目下、一部サブカル種コア属な層から絶大なる人気を集めている、6人組の地下アイドルバンドである。メンバーは、キーボードの『どりーみん』、リードギターの『のぞみん』、サイドギターの『まゆゆん』、ベースの『みのりん』、ドラムの『ひかるん』、お荷物ギターの『ともみん』。

なかでも特に『のぞみん』と『まゆゆん』は、不動の二大センターとして抜きん出た人気を誇っており、握手会ではファンの9割9分7厘が二人の前に列をなし、グッズの売り上げも段違い、露出の仕事も多く、それでいてギャラの割分は他のメンバーと変わらず、人気が出れば出るほど二人の負担は右肩上がりのうなぎ登り。そのストレスを発散すべく、多忙の隙を見つけては、GBNにログイン。誰かれ構わず因縁つけて絡み、フォースポイントをカツアゲし、加速度的に蓄積する猛烈な鬱憤を晴らしている彼女たちこそ何を隠そう、ノズ（のぞみんのダイバー名）とマーキー（まゆゆんのダイバー名）の正体であった。

そんな二人はある日、事務所スタッフの制作費持ち逃げ案件によってライブが中止となり、予定外に発生した時間を利用してGBNにログイン。いつもの如く憂さ晴らしのネタを求め、ダムドとクラッシュにてふらり立ち寄った、荒廃した歓楽街を思わせるディメンションを徘徊する中で、

「うふっ、おあつらえ向きのターゲット、はっけん」

「……どんぴしゃ……」

ひと気のない狭い裏通り、見るからにイキったリゼル三人組である。

それからはあうんの呼吸。互いに何を打ち合わせることもなく、マーキーのクラッシュは辺りを見回すと即座に狙撃位置を定めて移動し、ノズのダムドは、三人組みのリーダー格を直感で見定めると、その目前に歩み立った。

「……あぁ？」

「なにてめ？」

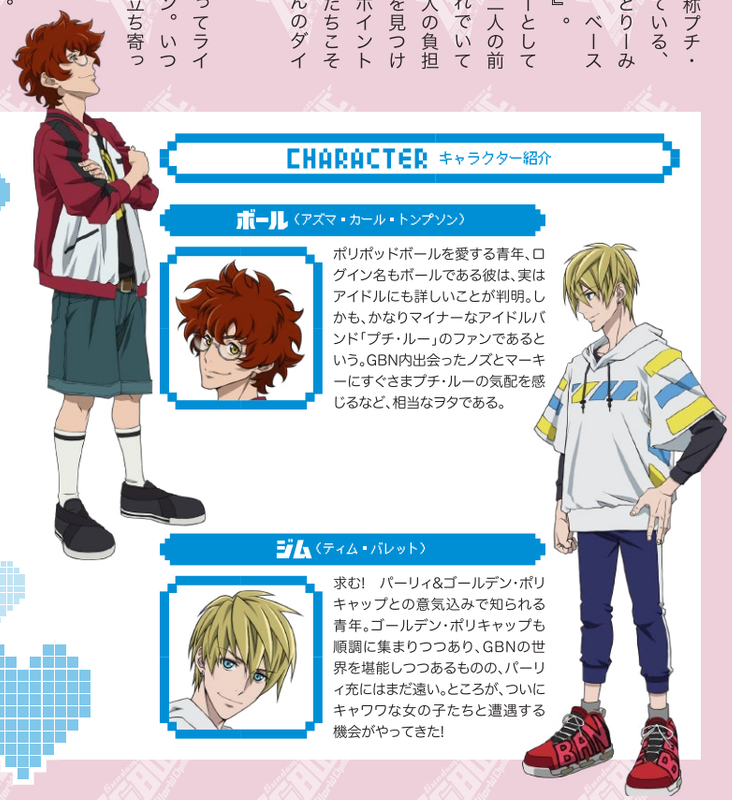
「殺されに来た？」

ノズは、背筋がゾクゾクするのを感じた。プチ・ルーのステージでみせるのとは違う、本心からの笑みを浮かべる。

「ねぇ、おにいさんたち――」

まがまがしい風貌のキュベレイから、まさか発されたアイドル声に、リゼルたちは「！」と色めきだった、しかしそれは一瞬。

「フォースポイント、全部ちょうだい？」



CHARACTER キャラクター紹介

ボール〈アズマ・カール・トンプソン〉

ポリポッドボールを愛する青年、ログイン名もボールである彼は、実はアイドルにも詳しいことが判明。しかも、かなりマイナーなアイドルバンド「プチ・ルー」のファンであるという。GBN内出会ったノズとマーキーにすぐさまプチ・ルーの気配を感じるなど、相当なヲタである。

ジム〈ティム・バレット〉

求む！　パーリィ&ゴールデン・ポリキャップとの意気込みで知られる青年。ゴールデン・ポリキャップも順調に集まりつつあり、GBNの世界を堪能しつつあるものの、パーリィ充にはまだ遠い。ところが、ついにキャワワな女の子たちと遭遇する機会がやってきた!

IDOL アイドル紹介

ノズ&マーキー

ジム&ボールと同じく、ゴールデン・ポリキャップを探し求めている女の子二人組。“ジェヴォーダンウルフ”というフォース名で、GBNにログインしている。キュベレイダムドを運用するノズは、白いゆるふわ衣装がポイントの可憐な女の子……というのは表の顔で、ハードボイルド映画好きの酒好きという一面を持つ。百式壊を運用するマーキーは、黒い衣装を身に纏う女の子。「ガンプラの破壊、だ～いすき」という声が聞こえそうなくらい、ガンプラの破壊が趣味。普段はふたりとも6人組アイドルグループLe Petit Chaperon rouge(ル プチ シャペロン ルージュ)、通称“プチ・ルー”のメンバーで、ファンに笑顔を振りまいている。が、アイドル業はブラックでストレスはMAX。本当はハーコーなロックバンドをやりたいらしく、ゴールデン・ポリキャップを手に入れることでその機会を伺っている。

※Le Petit Chaperon rouge
全員が赤ずきんのコスチュームでスウェディッシュポップ、60年代ガールズポップスなどを歌う。パフォーマンスはバンド方式。

Episode 4-A ……潰してやんよ、ぶちゅっと……

刹那の間。

「なに言って――！」

凄みをきかせながらダムドに一歩近づこうとしたリーダー格の膝裏を、いきなりクラッシュの狙撃が貫いた。つんのめって崩折れる。

他の二人が驚き辺りを見回した。しかし、取り囲むビルにはモビルスーツが身を隠せるような大きさの建物は見当たらない。

「……ぶっち殺す～♪　ブッ壊す～♪……」

クラッシュが位置取ったのは、それら建物の更に裏に建つビルの屋上からだった。マーキーはまさに神業とも思えるテクニックで、凄まじいオリジナル・スナイパーライフルの威力で、視界をさえぎっているビルを貫通させ、リゼルにビームを命中させる。

リーダーに続いて他の二機も、膝裏を撃ち抜かれその場に崩折れ倒れた、更に胸部、そして頭部。あっという間に生き残りはリーダー格のリゼルだけになった。彼も膝を撃ち抜かれている、身動きはとれない。

そんな彼をダムドは足蹴にし、仰向けに転がすと、その股間を思いきり蹴りつけた。何度も、何度も、何度も、強く、弱く、時に優しく、そして力のかぎり、蹴りつけ、踏み、にじりつける、何度も、何度も。

「も、もうやめてくれぇ！」

弄ばれているのはガンプラだ、それなのに、男のサガというのは悲しいものだ。

「フォースポイントなら全部やる！　だからお願いだ！　もう！　お願いだから！」

「なんだか今日はいい気分……フォースポイントなんてどうでもよくなってきちゃった」

ノズの顔が恍惚を浮かべる。

そこへマーキーのクラッシュも飛来する。ダムドと向かい合う形で地に降り立ち、ビルを貫くスナイパーライフルの砲口を、リーダーリゼルの股間に押し当てる。

「ひいっ！」

リーダーが息を飲み込む。

「……潰してやんよ、ぶちゅっと……」

マーキーがトリガーボタンを押し込もうとした――その時、なにやら毒々しい輝きが、ノズとマーキーを包み込んだ。

辺りの景色もイキッたリゼルたちも消えていき、いつしか闇の光とも思える漆黒の中に、二人だけが漂っている。

ふと、マーキーが気づいた。

「……声……？」

ノズにも聞こえた。

「……黄金に輝く、ポリキャップ？」

「それを見つけろ……」

声の主の姿は見えない。

「そうすれば……我々が、お前たちを、ブラックアイドル『プチ・ルー』から引き抜いてやる……バンドでデビューさせてやる……」

それはまさに一瞬のようで、それでいて、長い長い時間のようで――

気づけば二人は、ガンダムベースの隣り合うログイン・ブースに座っていた。

その言葉は偽りかも知れない、誰かがからかおうとしているのか、騙そうとしているのかも。

それでもなぜだろう。

惚けていた二人は、静かにその表情を向け合うと――ニヤリ大きく笑みを浮かべ、強く頷きを交わした。

機体紹介 1

AMX-004DMD　キュベレイダムド

美しいフォルムと威圧感が同居する、キュベレイの改修タイプ。ノズが運用する。機体サイズと不釣り合いなほど大型のマニピュレーターは、クローとしても使用できた。主な武装はファンネルで、無線誘導によるオールレンジ攻撃で対戦相手を苦しめた。

Episode 4-B もうゴールデン・ポリキャップ、アクセサリーとかに加工してさ――

あの日から今日まで、いったい何体のガンプラの関節をもぎって来ただろうか。しかし、

「金色どころか、銀色銅色のポリキャップすら、手に入らないんですけれど」

ノズとマーキーは、今日もライブの合間を見ては、GBNにログインし、黄金のポリキャップを探していた。せめて繋がる情報でもないかと、買い物客で賑わう繁華街ディメンションを歩き回る。

「……ひょっとしたら、マジでからかわれたとか……？　誰か知らねぇけど、もしそうだったら、ぜってぇ潰す……」

二人はもはやあきらめの心境で、歩道と車道とを隔てるガードレールに腰掛けうな垂れた。その時、

「つーか、カワイイガンプラ女子らとゴキゲンなパーリィなんて、ぜんっぜん実現しないんだケド」

「もうゴールデン・ポリキャップ、アクセサリーとかに加工してさ――」

ゴールデン……黄金のポリキャップ！　ノズとマーキーは、ハッと声の方を見向いた。

「それで釣ってみるっての、どうかな？」

「マジそれ、やっちゃう？」

冴えない表情の男子が二人、同じガードレールの先に座っている。

ジムとボールである。

Episode 4-B ～初めてなの……なぁんてね♪～ Like a virgin

光と闇、裏と表、不浄と清浄、純真に不純、世辞と皮肉、不承不承と唯々諾々、売れっ子にお茶挽き、押し割り麦に挽き割り麦、出稽古と内稽古、ポーダージュとコンソメ、富める者と貧しい者、支配する者とされる者、模倣と創造――この世界のすべては二つのモノで出来ている。政治しかり、経済また、宗教に宇宙、そしてガンプラ。

それは手が届くほど近くかもしれない。それともあるいは星の裏側か。いずれにせよ聞き及んでいるのは、その場所を知ってしまえば最後、明日は朝日を見られなくなるという、まことしやかな噂だけだ。

一〇名ほどの男たちが集っている。仕立てのよいスーツに身を包み、マボガニーの長テーブルについているのは、下座は三〇代後半から上座に八〇才近く。彼らこそがなにを隠そう、フェイク・ガンプラで全世界を牛耳ろうともくろむ一大闇金型マフィア、そのトップと幹部（カボ・レジーム）の面々だ。

マフィアの集会と聞けば、紫煙満ちる薄暗い隠し部屋を思い浮かべるかもしれないが、しかしそれもひと昔。いまは燦々と陽が差し込む高層ビルの最上階、清浄機が吐き出す空気も爽やかなミーティングルームで、しかし誰もがみな、苦虫を噛んだ表情を浮かべていた。

「件（くだん）の二人組につきましては、現在もその正体を確認中です」

カボの中でもいちばんの若手が、緊張をにじませ報告をあげている。

「しかしGBNの個人情報プロテクトに対する姿勢はかたくなでして……目下、さまざまな方面から圧力をかけ、はき出させようと努力はしているのですが」

「やり方がぬるいのでは？」

隣に座るヤサ男風が、グレースーツの襟元を正しながら、うす笑みの奥に牙をのぞかせる。

「確かにいまのところ、彼らが我々の計画を世に露呈した形跡はうかがえな

Episode 4-B

ごめんなさい、本当のことを言うと、声を掛けたのは、お二人に一目惚れしたからじゃなくて……

い。しかしそれには理由があると見るべきだ。あるいは、我々が最大の窮地に陥るタイミングを見計らい、脅しを仕掛けてこようとしているかも」

「ならばこそ、慎重に動かねば」

向かい合う紺色スーツのアンダーボスが、眼光鋭く戒めた。

「軽はずみに行動することのない冷静さを見るに、その者たちは相当の切れ者に違いない。下手に対処し、察知されれば、それこそ取り返しのつかない結果を招きかねんぞ」

どうやらグレースーツはカボの中でもかなりの実力者のようだ、アンダーボスの座を虎視眈々と狙っているらしい。他のカボたちが口を出せずにただ傍観するなか、放っておけば話し合いではなく言い争いになりかけたテーブルに、

「それよりも……」

上座よりドンの声が、静かに割り入った。

「気になるのは、GBNの中に閉じ込めておこうとしたその者たちをログアウトさせたという、例のポリキャップのことだ……」

黒のダブルをゆったりと着こなす彼に、全員が視線を向けた。

アンダーボスが頷き、

「確かに我々ファミリーのスーパーウルトラサイバー介入を打ち破るとは、驚愕のツールかと」

グレースーツも同調する。

「しかも詳細は不明、誰がなんのために作ったのかすら……わかっているのはそのポリキャップが、黄金色に輝いていると言うことだけ」

「黄金……ふざけたことを……」

ドンが重々しく目を細めた。アンダーボスとグレースーツが同時に、先に報告をあげていた若手に目で促す。彼は慌てて、

「黄金のポリキャップにつきましては現在、GBN内に協力者を擁立、鋭意調査中です」

「使える者か?」

ドンが問う。

「かなりの手練れかと」

「うむ……」

納得の声を洩らすと、おもむろに立ち上がろうとするドンを、アンダーボスとグレースーツが両側から支えようとした。しかし彼はそれを静かに拒むと、集う皆の顔を大きく見回した。

「いまこそ闇と光とがその役割をただす時、我らが宿願の成就に、御力を添えたまえ……ガンプーラ!」

「ガンプーラ!」

ドンに続き、一同の声がひとつになった。

窓の外には、雲ひとつない青空が広がっている。

*

夢にまで見るほど待ち焦がれたものが、突然目の前に現れた時、人がそれを事実として受け入れるまでには、焦がれた度合いに比例した時間が掛かるものらしい。

ジムとボールを例としてたとえるなら、いきなり目の前に、まるでアイドルかと見まがうばかりの美少女二人組が現れ、「お二人に一目惚れしてしまいました、もしよろしければ、近くのカフェでお話でもしませんこと」などと声を掛けてきたという事態に直面にしたいま、まずは「なにを高額で買わせようとしているのだろうか?」と疑い、次いで「きっと、綺麗は綺麗だが果たして提示された価格相応の価値があるのかどうなのかよくわからない海をモチーフにした現代絵画にちがいない」と疑いを深め、「まてまて、誘いに乗るとあとから面倒くさい男が現れ脅されるパターンもありえるぞ」と別の疑いをも模索し、あらかたの疑いが出尽くした今も、他にもなにか可能性があるのではないかと、目前の美少女たちを無言で見つめたまま、既に一〇分の時間が過ぎていた。

ジムとボールにもひしひしと伝わっていた。これまで暇つぶしに逆ナンしたズとマーキーにもひしひしと伝わっていた。これまで暇つぶしに逆ナンした中にも同様に、すぐには誘いに乗ってこない根性なしは少なからずいた。自分たちのあまりの美貌が皮肉にもアダとなってしまっているのかと、そのたびに自嘲してはきたが……まさか、眉間にしわを寄せたまま、無言で一〇分とは。

あるいはこの二人、自分たちの魂胆を見抜いているのか?

もしそうであったとしても、このままではらちがあかない。ノズとマーキーは刹那のアイコンタクトで賭に出ることを確認し合った。

「ごめんなさい、本当のことを言うと、声を掛けたのは、お二人に一目惚れしたからじゃなくて……気になる会話が聞こえたからなの」

ノズは申し訳なさげを装い、告げた。

「……」

ジムとボールは警戒を解かない。

Episode 4-B

二人のその喋り方、似てるって言われるでしょ? 『プチ・ルー』の『のぞみん』と『まゆゆん』に!

「ゴールデン・ポリキャップ……って」

二人の目が、小さく見開いた。

マーキーもすかさず加勢する。

「……きっと、すごく、素敵なポリキャップ、なんだろうなと思って……」

ジムとボールの眉間がしわを緩める。

ノズは畳み掛けた。

「是非、その黄金のポリキャップを拝見させていただこうと思ったのですが、いきなりそんな不躾なお願いをしても、きっと聞き入れてはいただけないだろうと思って、つい、一目惚れしてしまったなどと偽りを告げて気を引こうと……本当にごめんなさい!」

ノズとマーキーがウルウルと申し訳なさそうに目を潤ませた――次の瞬間、まるで氷の塊が音を立てて溶けるように、ジムとボールは警戒の表情を解いた。

「なぁんだ、だったら最初っから言ってくれればいいじゃん、そんなの全っ然ウェルカムだし!」

俄然アガるジムとともに、ボールも打ってかわったデレ顔を浮かべて、

「こっちこそごめん! 二人のこと疑うみたいな目で見ちゃってさ、ほんとうは嘘なんてつけない、とっても正直で素敵な女の子たちだったのに!」

ノズとマーキーは、賭けが吉とでた事を、視線を交わし祝い合った。

「しかもさぁ!」

ハッとボールに視線を戻す。

「二人のその喋り方、似てるって言われるでしょ?」

「どなたにです?」

聞き返すノズの隣で、マーキーが小首をかしげる。

「『プチ・ルー』の『のぞみん』と『まゆゆん』に!」

ノズとマーキーはハッとなった。まさかGBN内に、ド変化球マイナーを自認する私たちを知っているダイバーがいるなんて。

なんであれ、自分たちがこれまでやってきたアレコレや、これから引き起こすであろうナニソレをかんがみるに、リアル世界での正体を決してバラすわけにはいかない。「どなたですか、その『プチ・ルー』」とおっしゃる方は?」ノズがしらばっくれようとするより一瞬早く、

「誰? それ? ルー? カレー?」

ジムが問うた。

機体紹介 2

MSR-00100CR 百式壊(クラッシュ)

マーキーがカスタムビルドし、運用している漆黒の百式。シャープな体躯が特徴的なこの百式は、バーニアとウイングバインダーの装着により、機動性・運動能力に非常に優れる。可変式のビーム・ライフルによる射撃能力も高く、キュベレイダムドとの連携により大量破壊活動が可能となっている。

Episode 4-C

このワビサビは、到達した者じゃなければわからないだろうね

Girls Girls Girls ～ムフフ ムフフ～

ボールが、噛みつくように言い返す。

「プチ・ルー！　ちゃんとした名前は『ルプチシャペロンルージュ』って六人組のアイドルバンド！　『のぞみん』はそこのリードギターで、『まゆゆん』はサイドギター！　僕、超大好きなんだプチ・ルー！　曲もビジュアルもよくてさ！　そう！　このあいだずっと行きたかったライブやっと行けて、しかもチケット最前列でさ！　それも真ん前がいち推しののぞみん！　後半ステージ超盛り上がって、のぞみんの汗とか唾とかビショビショ飛んで来て顔とかに掛かってさ、僕あれから今日まで顔洗ってないんだ！」

ノズとマーキーは、心の中で指折り数えぞっとした。もっとも最近のライブでも、一週間は前になる。

「ぞ、存じ上げませんわ……そのような方々……」

思わず表情がひきつる。

「ええ～！　二人とも雰囲気ものすっご似てんのに！」

「やめれって！」ジムはボールをたしなめた。

「二人ともガチ引いてんじゃん。キモいよね、アイドル・オタなんてさ。オレにはさっぱりわかんね。だってんなの、いっくら可愛くてお気に入りだからって、どんだけ追っかけまわしたところで、別に付き合えるわけでもねぇし、そんなの金どぶに捨ててんのとおんなじじゃん」

そう言うジムを、ボールは逆に哀れみと蔑みの混じった目で見下す。

「まぁ、このワビサビは、到達した者じゃなければわからないだろうね」

堂に入ったものだ。

一方でマーキーは、癇に障った様子で思わずギッとこぶしを握っている。その手をノズは、そっと抑えると、

「それでは是非今度、黄金のポリキャップを見せていただけますか？　遊園地でガンプラ・デートなんてしながら」

「よろこんで！」

嬉々と返すジムとボールにうふふと微笑むノズの隣で、マーキーも必死に笑みを作る。日取りを決め、別れ去り際、

「そうそう――」

ノズは足を止め、ジムとボールの方を振り返った。

「さっき、ひとめ惚れは嘘だって言いましたけど……なんだか、嘘じゃなくなりそう……」

薄く頬を染めるノズに、ジムとボールは思わず心を鷲掴みにされ、そしてマーキーは、その周到さに感心の笑みを浮かべた。

「うんだよゴールデン・ポリキャップ！　逆ナンのエサになるとかって役に立つじゃん！　超優秀じゃん！」

渾身の魂を込めガッツポーズの拳を握るジムの隣で、ボールは両手を高らかに掲げ天を仰いで、

「ごめんなさい！　アクセサリーにでも加工してやろうかなんて言って！」

星の裏側だかドコ側だかで闇金型マフィアたちが恐れおののく二人組は、彼らのことなど露も忘れ、こうしてアイドルばりの美少女（GBNの外では実際にアイドルであるわけだが）からガンプラ・デートの誘いを受けた幸運に、生きているという実感とその喜びを噛みしめていた。

「ショートボブの子がノズちゃん、黒髪ロングがマーキーちゃん、か……」

ボールは、ノズが去り際に「大切なことをお伝えし忘れていました！」と、わざわざ駆け足で二人のもとに戻り、相互リンクしてくれたプロフのウィンドウを（もちろんこれも彼女のあざとい演出だ）、目前の空中に開いて見返した。

「健気でいい子だな……ノズちゃん」

「マーキーちゃんだって。オレ、あんまり喋るの得意じゃなくて、一歩引いたところから見てる子とかって、なにげにそそられるつーか」

駆け戻って来たノズの遠いうしろで、はにかむようにこちらを見ていたマーキーを、ジムはしみじみ思い返した。

「ヴィオラもあんなふうにおとなしかったら……」

フィアンセである従姉妹を重ね、ぼそりと洩らす。

「だれ？」

「誰でもねぇし……てか、プロフで連絡先教わったんだし、なんかお礼的なメッセージとか送っといた方がザ・ジェントルマンなんじゃね？」

「気が利くじゃんジム！」

さっそくメッセージウインドウを開いてメッセージを打ち込もうとしたボールは、ふと、

「そういえばさ――」

と、指をとめた。

「ノズちゃんの声、どっかで聞いたような気がすんだよね」

Episode 4-C

いまは、自分なりの新しいバトルの形を試行錯誤する、そんな貴重な時間を与えてもらったんだって、そう受け止めてる

「だからアレだろ？　甘口中辛辛口に似てるんだろ？」

「カレー・ルーじゃなくてプチ・ルー！　……じゃなくてさ、それとは別件のどっかで……」

＊

じゃあ明日、会えるのをとっても楽しみにしてるね――フォースネストであるペントハウスのリビングで、あぐらをかいてソファに座り、目前のメッセージウインドウにフリック入力するノズの表情は、ヘドが出そうなほどにうんざりしていた。マーキーにいたっては、もはや熱を出し寝込んでいる。

GBN内に数カ所ある遊園地ディメンションのうち、もっとも早く貸し切れるものでも、数日は待たねばならなかった。しかも少なからぬフォースポイントを割り増ししてでもだ。いや、ポイントならこれまでカツアゲした分が腐るほどある。悩みの種は、例の二人組から届くメッセージである。

日に一〇〇〇通は送られてくる。

とにかく黄金のポリキャップを手に入れるまでは、彼らの機嫌を損ねないようにしないとならない。はじめはノズとマーキーの二人で手分けして気を引くレスを返していたが、普段でもマネージャーからの重要な用件メールに対し十件に一件返信すれば上出来のマーキーに、この苦行はあまりに重荷すぎた。

「……暇人が。クソキショいわこいつら……ブッコロ。……」

マーキーのうわごとを聞きつつ、ノズは、

「黄金のポリキャップを手に入れるまでのがまん……黄金のポリキャップを手に入れるまでのがまん……」

自らにつぶやき言い聞かせながら、ウィンドウを叩きつけるように、返信の末尾にハートマークを打ち込んだ。

＊

観覧車にジェットコースター、メリーゴーラウンドにコーヒーカップ、カラフルポップでかわいいアトラクションやアクティビティのすべてが圧巻のモビルスーツサイズ。

「すっげぇ眺めだな！」

圧倒され息を飲むジムの一方で、ボールは不思議そうに、

「けど、なんか、僕たちのほかに客が誰もいないんだけど、この遊園地ディメンション」

「超ラッキーじゃん！　その方が四人デートの邪魔入んないし、なんなら周りの目気にしないで、ムフフなアレとかウホホなソレとかし放題……つーかボール、マジそいつで来たんだ？」

ジムが言う「そいつ」とは、ポリポッドボールのことだ。

以前、シモダのフォースネストの倉庫前で、謎のキュベレイにより１８０㎜キャノンを破壊されたボールの愛機。ストームブリンガーと並び立つその機体の脳天にはいま、メインウェポンに替わって巨大なスピーカーがひとつ、堂々と鎮座している。

「１８０㎜を失ってしばらくの間は、自分の身を切られたみたいに打ちひしがれたけど――」

かまわずボールは続ける。

「いまは、自分なりの新しいバトルの形を試行錯誤する、そんな貴重な時間を与えてもらったんだって、そう受け止めてる」

「新しすぎっつーか、試行に対し錯誤の割合多くね？」

「確かにまだ迷い旅の途中ではあるってのは認めるけどね、それでもある意味、ひとつの完成形には到達できたんじゃないかなって思ってる」

「なんだかよくわかんねぇけどちょっと離れてくんない？　ノズちゃんとマーキーちゃんに同類だと思われたくないから」

と言いつつストームブリンガーがポリポッドボールから一歩離れた――その時、ジムは、何かが近づく気配を感じた、

「マーキーちゃん！　ノズちゃん！　すげぇゴキゲンな遊園地じゃん！」

そう告げようと振り返った先に二人はおらず、代わりに、

「っ！」

凄まじい出力のビームが、まさに間一髪、一歩移動する直前のストームブリンガーの立ち位置を貫き、一直線に飛びすぎた。

「……んだぁ？」

ジムは唖然と声を洩らした。

「キュベレイ!?」

更なる気配、今度はボールが上空を見上げた。そこにいたのは、

ボールが叫ばんとしたところはシモダのフォースネストの倉庫前で、ポリポッドボールの１８０㎜を引きちぎった、あのキュベレイ！

そこへ間一髪キュベレイが降り立ち、その巨大な爪で地面をえぐる。

二人と対峙したキュベレイの――キュベレイダムドのコクピットでは、ジムやボール同様、ノズも驚いていた、二つの事に。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 4-C

クズムシは後回しでいい！やっかいそうなガンダムから潰す！

「こいつ……クズムシ!?　あの時の!?」
そしてもうひとつは、
「……マーキーが、外した……？」
互いが唖然と向かい合うなか、ふとボールは気づいた。
「さっきのビームの射線……キュベレイが来た上空からじゃなかった……」
慌て、ジムに告げる。
「もう一機いる！」
「なっ!?」
ジムとボールは咄嗟に再度、はねるように位置を変えた。
次の瞬間、ビームがかすめ過ぎる。
遊園地よりはるか離れたアトラクション建設用の資材置き場にて、お決まりの膝撃ち姿勢でスナイパーライフルを構えている百式クラッシュ、そのコクピットでマーキーは小さく舌を打った。彼女も微かに動揺している、気持ちの揺らぎが狙撃の精度に出る。
本来なら一撃目で獲物の足を止め、ダムドがその爪でとっとと肢体をもぎ取り、関節にあるであろう黄金のポリキャップを奪う手はずだった。
一刻も早く事を済ませたかった、なぜなら――
「なんだよおまえら！」
そのとき、クラッシュの、そしてダムドのコクピットに、ジムの声が飛び込んできた。
「オレらのデートパーリィの邪魔すんなよ！」
悪態のひとつも叩きつけようとしていたノズはハッとした。
「そっか……こいつら、わたしらの正体に、気づいてないんだ……！」
ノズは、オープンにしかけたラジオ（交信回線）を慌ててフォースクローズ（フォース専用回線）に戻すと、
「クズムシは後回しでいい！　やっかいそうなガンダムから潰す！」
「……わかった……」
マーキーはひとつ大きく深呼吸すると、再度スナイパーライフルの狙いを定め直し、トリガーボタンを押した、発砲。
その照準はいっそう研ぎ澄まされ、出力も変わらず強力だったが、
「なんなんだよお前ら！　オレらのムフフとかウフフとかの邪魔すんなよな！」
そんなジムのパーリィに対する執念は、マーキーの狙撃の腕を紙一重で凌駕した。狙われれば凄まじいマニューバでメリーゴーランドに身を隠し、それをライフルのビームが破壊すれば、今度はコーヒーカップの陰に身を移す。
その動きを止めようと、ダムドがストームブリンガーの行く手を遮ろうとすれば、ポリポッドボールがその動きを牽制する――ジムに負けず劣らず、ボールのパーリィ魂が、
「僕らはぜったいにノズちゃんやマーキーちゃん達と、あんなことしたりこんなことされたりするんだ！」
その情熱が、ポリポッドボールの機動に憑依する。
マーキーはいっそう口元を固く結び、ノズは垂れ流す毒が濃くなっていく。
「こいつらなんなの！　ゲロ吐きそうなんだけど！」
それでも、クラッシュの激しい狙撃に、ダムドの鋭い爪に、遮蔽物という遮蔽物はみるみるうちに身を隠すに値しないほどに朽ち、反撃する暇も与えられず、遂には、
「もうあのテーマアトラクションのドームしか身を隠せるトコ残ってない！」
「しょうがねぇ！　突っ込むぞボール！」
「逃げ場なくすかも！」
「だからってこうしてたところで、いつかは焼かれっか切り裂かれっかのどっちかだ！　シチュエーション変えりゃ流れも変わっかも！」
「わかった！」
目指すドームに突入してゆくストームブリンガーとポリポッドボールの姿に、マーキーは、そしてノズは、ようやくニンマリと余裕の笑みを取り戻した。
「そうね、流れが変わる……これでやっと」
逃げ込んできたジムとボールは圧倒された。ドーム内に広がっていたのはファンシー&キュートなお菓子をテーマにしたアトラクションだった。パステルピンクを基調としたなかに、カラフル満開のキャンディーやマカロンたち、加えて遊園地のマスコットキャラがモニュメントとなって、一帯の地面を覆いつくしている。
ダムドがやってくる。
咄嗟にストームブリンガーが構えたライフルを、飛び来たビームがはじき飛ばした。加勢に急行したクラッシュだ。

もはやジムとボールは万事休す。
そしてノズとマーキーは勝利を確信した。
「うふ、うふふ……」
ノズは愉快そうに笑い出した。
マーキーも吊られて、
「……はは、あははは……」
ダムドとクラッシュが、思わずといった様子でダンスをはじめた。
まさにその絵は狩りの獲物を前にした狂気の宴。
「うふふっ！　うふっ！　うふふふふっ！」
「……あははっ、あはっ、あはははっ、あはははっ……！」
その時、どこからか、それは聞こえてきた。
ノズとマーキーはハッとした。
「ボール？」
ジムは驚き、いぶかしげにポリポッドボールを見た。その歌は、ポリポッドボールの脳天に鎮座する巨大なスピーカーから発せられていた。ボールのモスト・フェイバリット、プチ・ルーの代表曲、そして――
ノズとマーキーは、いつしか笑い声を飲み込み固まっている。
「僕はあきらめない」
ボールは必死に告げた。
「大好きなこの歌が……ののみんや、まゆゆんたちが、僕に教えてくれているみたいに……なにがあってもノズちゃんやマーキーちゃんと一緒に、ガンプラ・デートをエンジョイするんだ！」
「ボール……！」
ジムは大いに感銘を受け、そして――
「……うん……急いで、戻んなきゃ！」
「……！」
なにやらあたふたと交わされた二人のやりとりは、ジムとボールには聞こえない。突然ダムドとクラッシュが踵を返し去って行った。アトラクションドームの外から、スラスターを最大に吹かす音が聞こえる、それが遠くへ消えていく。
ジムとボールはそれぞれの愛機のコクピットから、きょとんと顔を見合わせた。

＊

「遅いってのぞみん！　まゆゆん！」

⬇Kawaii空間でバトルを行うキュベレイダムド、百式壊&そしてガンダムストームブリンガー。ガンプラ・デートの雰囲気だがシリアスな戦闘が行われているのだ。

「あんたたちがいないライブなんて、お客さん暴動起こすしー！」
ハラハラと待ち構えていたプチ・ルーのメンバー達に向け、二人は小さく舌を出して、
「……ごめん……」
「すぐにメイクして着替えるから！」
「メイクはいいから！　急げよ！」
マネージャーは激怒している。「はーい！」と素直に返事を返すが、それも黄金に輝くポリキャップを手に入れるまでの辛抱――小さく肩をすくめ合い視線を交わすと、急ぎ、赤ずきんをモチーフにしたステージ衣装に身を包む。
客席から楽屋内に、開演を待ちわびるファンたちの声援が漏れ聞こえている。
のぞみんを呼んでいる、まゆゆんを待っている。
二人はふと、ボールの叫びを思い出した。

*

あれからどれだけの時間が経っただろう。破壊されつくし、もはや遊園地の体を成していない広大な廃墟に、それでもジムとボールはいまも立ち尽くしている。
「遅いな……ノズちゃんとマーキーちゃん……」
「だね……」